

武江年表

二

203
フ
2

武江年表卷之二

寛永十三年 丁丑 三月 閏

三月 天海傳正志願^{しんげん}ふより切經^{きりきやう}二子巻を刊行せしめり

○八月 轉生^{かぎふらん}元南^{もとみなみ}率^{ひら}儀^ぎを撰^{せん}て華^{くわ}以^い祖^そ殊^{じゆ}

の祖^そ父^ふなり ○七月 八日 星^{ほし}月^{つき}を考^{かう}く ○十月 肥^ひ前^{まへ}を考^{かう}く ○二月 殊^{じゆ}儀^ぎあり

○江戸^{えど}中^{なかつ}風^{ふう}呂^{りよ}屋^や女^{にょ}之^の人^{ひと}踏^{ふみ}りふ命^{いのち}あり

同十三年 戊寅

夏^{なつ}より冬^{ふゆ}年^{とし}二^に三月^{しがつ}以^{もつ}ふ至^{いた}るまで遠^{とほ}をの男女^{おとこめ}作^{つく}勢^{せい}字^じ席^{せき}

指^{さし}する事^{こと}駭^{おどろ}き



○東光山為福と神田を奪り淡菜水城と稱す

○十一月小川小糸松山東海と清刺立東山は菴和島

○今年以來豊國の首を捕りてあつと云

寛永十六年 己卯 十二月四

駿府清城番は書院番へ命せしむ

○宮田為方と宗剣東山貞宗和尚淡菜水あり一
おの親世書をあつたりうら

同十七年 庚辰

二月日光山廿五回清神忌に於修行有○二月より八月末まで

天下牛多く死に○此頃何某度小宮つとせし一浮舟方系中

りつとるが小年十六 男名一の意地ふとて今年二月同席細肘と稱し

りあを切害おろ一とて八月同月をれの日を忌とて命せしれ淡菜水城と

り於る自らをめふを所方系と男名の幾りあり一同席小川

系女うねめとてつとるが小年十八 もあふありて偶々自ら害して矢々を世に

世のつとるがとあつけりたを稱
世の号

まの光輝と月よきたまふれてあつり一ひもあのみとあ

系女海世の号

も強ともけいさくあもとあつたのいとまてとえ人あての山川

ら調素を志しつとる藤原初代とつとる系一冊ある書とあつたを

他若六洋あつては病室の編の男名大徳もは其書を裁りめせ
梅の小葉書
ちばい

隆平あ後者の隣あり一此の事ありて名を西うり貞宗中今の地とつ

る此の始曲亭と名あつて洋を仰り貞宗のあつて類しとて思考の深しとれり一を今

あつた
○六月長宗と耶蘇宗の族黒船一艘を東長崎へ漂着のり
六十余人を捕せしむ○九月六日法殿山あつ

夕暮を惜ごし、まへ本のつらき事あり、是は海賊の月、以て

寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜桶町より火入望海日暮よりけり、鎮守町に於て七町が家
より二百丁が夜慶を以て火の大小とせり

○諸家系圖二百七十年巻添粘 林道春生を主殿係士とせり
五山の傍侶修撰ありしとあり

○東叡山より大野院へ巡行執事等あり 上野五條天神社へ玉瀧天神

を合祭す ○柏木村田原より東原堂より日局法再建 うまのつたの

○二橋村を齋通町と号す え海六あり又改
て小川町とせり ○東原より標田より女と痛

福さる ○青松より貝塚より忠宅家中へ福さる

○七月、兵部ありて、海軍中佐王子権現縁起撰述あり、終つて持時

至馬の尊あり ○秋葉敷梅子村不熱 ○八月朔日大風、船十艘の石

船品川沖へ沈む 後浪人この西を根と号し、漁籠り毒ありと云一浪小舟を十一
八月廿日倭豆は柏府川より大石を移りしと云、船沈没せし根を

○八月津田富東賞守子仁生よりる像を並 異代後等及如
宝海上人とあり

○北より海舟が中折 三浦津
ん池

同十九年 壬午 九月間

正月朔日大雪 ○二月大雪 ○二月十九日浪をもち焼亡 は馬村市系
といふあり

○二月より七月より、天下大肌腫米價貴躍し、死人多し、由被米

後をぬき ○八月諸候系勅交代始り

○夏服中候得以上中向あり、八月朔日法障落の自澤店所へ、定要を

為り、小年曉あり ○二十二間堂始り、儀事あり、建 来三人の由替町
より作候、全海傍

○正月は、人あり、法寺、藝古の、清島地、二十二年、重造官あり、と云、志願、子付、信、心、執、美、あり

とり内令うちさきをみりたりと法家の徳をたつてつひに成徳を成すなり
親世者と八幡やまふり小夫こおとこありの非伴八幡やま正寄附ありとるとり

○あづま物語あづまものがたり 記の始あり

寛永二十年 癸未

六月朝鮮人來聘

正徳平順之前後諸綱領事申竹堂藤波本並ちちりこのとき
申竹堂より取戻りたりとて林春海喜連二上人を相する諸君を
著せり

○今年六月羅山人わしやんじん生春海せいしゅんかい子こともとももも山王さんおうを看るの

記あり生せい生せいふふ集しゆ土と見み因いん○羅山らざん喜き亦ふ二に生せい上じやう宗そう癸未みづのえ記き行ぎやうあり

○八月永代えいだい海かい八はち幡はつ宮みやをを禮らい始はじめふふ○十月二日天海てんかい傍はた正せい寂じやく 數百二十
ととり

二月より毘沙門びざもん寺じ法門はふもん跡あと公海こうかい傍はた正せい寂じやく隱いん殿でんあり

○十八年の冬より今年まで汎はん艦かん續つづりり○あづまめり板いた成なり

始書名を色音流しきおんりゅうと云い申すなりは正代せいだい野の種むねのを花はなをを採とりて是こゝにて文ぶん付つけこ
とを考かうへりて色しきをを播はくとはは播はくの色しきをを考かうへりて音おんのを考かうへりて折せりて義ぎのを考か
へりて名なをを記きするはは書を始はじめとり

卅年間記事

井上いの上福ふく富とみ友とも友とも大だい筒とんの町間まちまをを試しらまして一いつ不ふをを後ご漢かんとり疾しやく炮ぱう剛こうとりふ

○正徳せいとく比ひ赤せき寸すん天てん六りく寛かん永えい津しん天てん海かい傍はた正せい寂じやくの基きをを立たてりては殿でん山さんの麓ろく竹たけ生せい傍はた

をを採とりて心こゝろをを考かへりては谷や竹たけ某か某か傍はた心こゝろをを熟じやく然ぜんとりては後ご漢かんとり折せりて義ぎのを考か
へりて名なをを記きするはは書を始はじめとり

のを考かへりては谷や竹たけ某か某か傍はた心こゝろをを熟じやく然ぜんとりては後ご漢かんとり折せりて義ぎのを考か
へりて名なをを記きするはは書を始はじめとり

○約やく八はち幡はつ宮みや再また建たりてあり○佛ぶつ日にち山さん東とう祥じやうとりては中ちゆう麻ま布ふ是こゝあり

坂さか小こ宗そう刺さありてはは寛かん永えい永えい中ちゆう今いまのの字じ偏へんのの地ちをを考かへりては後ご漢かんとり折せりて義ぎのを考か
へりて名なをを記きするはは書を始はじめとり

のを考かへりては谷や竹たけ某か某か傍はた心こゝろをを熟じやく然ぜんとりては後ご漢かんとり折せりて義ぎのを考か
へりて名なをを記きするはは書を始はじめとり

○寛かん永えい永えい中ちゆう小こ日にち谷や一いつ行ぎやう院いん宗そう基きをを考かへりては後ご漢かんとり折せりて義ぎのを考か
へりて名なをを記きするはは書を始はじめとり

○海かい緘けん橋きやうとり松しょう尾び橋きやう強きやう正せい橋きやう近きんのの川がは通とほりてはは寛かん永えい永えい中ちゆう船ふね
通とほりてはは寛かん永えい永えい中ちゆう船ふね

通周とゅうしゆうのの船ふね長なが八はち丁てい木ぼく橋きやう通とほりてはは寛かん永えい永えい中ちゆう船ふね
通とほりてはは寛かん永えい永えい中ちゆう船ふね

後夜橋

今具後橋あり寛文
との圖おもあつ記せり

二ごくとぬ

今の所川
あり

以上寺院の号町名文字詳あつされの系本小柳りて後字のまふ記は

○江戸繪圖梓河すの末の實永水小始り〜あや其よりいよのりの世小

修りけ世時代の圖と南の世橋上をきくは是路りぬは世橋端鞠町の

入口海池を路りぬ小川町井田川流茶橋を路りぬ大川を路り

て載る本の方城校〜善悪源吾の圖
もこき小園寛文はより江戸小度くもまきり

○世上通用の書籍の記記小一筆書と致〜ゆと書〜事〜は〜り

始り〜目〜え〜り女子の一筆と書ぬ事ぬ事ぬ又ふ〜ぬ〜こ〜

ありとあん 東海流着系
あふりえ〜り

○本村誼十郎言致〜續武が困後云校兼の實永の末ふ江戸あて

お来は〜る〜校行〜りゆりのそ用ふ是さ〜書〜書〜の〜は〜田長門ち

始り製は葛終り稀あり〜多き番の徳士教具を本橋袋小入是を

番袋せり必付り〜せ〜せ〜と〜〜と〜

○薩摩小年々 泉夜堀の毒
或紀夜夜と云江戸より申橋小終り採芝居を具行せ

舟山先せ向陽後耕の二子を誘引〜人舟せ〜色〜の〜せんせ
ふの直系小ありさるまを交う事予ら声曲教算ナリあるせり ○事師合考小淨福陽

語悦短人形也〜書〜書〜寛永元年以後迄〜京大坂より〜り〜

〜の〜と〜り〜

○花浮踊りひんご節あをり行橋あどりる小唄行り 尾崎市所流と
りつ小唄もこの

時代より 貴族勢を畜ひ椿花を弄ぶ事なり あぢあぢ〜小寛永の頃の
を弄り物をとり傳ふるを

うんたをなま〜ひ〜ま〜せる親世をまゐひん春うら〜ひ
さんとあ〜ぬの羽衣を友をうけて用ひる〜〜記せり

○中島浮雲といふもの江戸あて未犯胎を〜り〜始り

○春甚獨語も云寛永の頃風俗男は草のうら〜け草の袴を

其後より女の紫草の足織をさうく成能たけまひとせり婦女乃
 帯の合らん様をさる藤の結より星北小梅梅松をさく小織付か是を
 鉢の玉た帯より名付て結よりけり度さよりづる小織尺の二寸斗の
 紙をんこし織こちど入る事ありに月より八月まで婦女の礼後
 けり織より度さ織尺の八寸よりけり織を造り結ひてたうと付帯
 とり小今の巾あ帯の首の帯より度一中畧男女の衣後首と
 極ちく質ち素あり男子も女子も十にぬ又まて六寸尺計ちをさく
 むより織尺計七八寸を極りとせり貞享の比より式尺計けり
 ありまよりからかまひく長くありて近き比の二尺にぬすけり
 ありぬし見ゆ婦女の帯も貞享元禄の比よりも漸く度くあり
 て今の織尺あり八九寸小及小綿を志んとあ袴あのごうちとこの

肩うのこの首と麻の幅織尺の八寸計ありし小貞享元
 禄の比より幅より尺小及小寛水の比より婦女細ち麻繩あてち
 造りてよとを造き縮めて巻し小は後麻繩を止く紙あの
 巾織糸のよとより粉紙あて元結紙あのよりのを造りかして造
 肉ちの婦女皆是を用し更とりの縮あを巻事も止ぬと中畧江戸の婦
 女亦出るむしのきまして造き縮あをち面あを色く目あり
 あらしけり其後織より面を造りみし八家二十あまり室取
 の比ありし今よりちのさる織を造りしきしのこあて面をあ
 らあしてしを造して織あを造をち中畧男の面をあるしき
 りの織あは編あの肩の上としをあるし織ありし女あの
 ちありし帽あをありて面をあるしありたのち巾あ後面あのありし

○十一月十二日 台命ふより王子村に於て松平藩に於て大進お

真行あり る協い事あるに十三万石山に十万石平坂郡林の辺あり

○十一月箕輪某より後向ふ地境を遊 世春海法下遊之あり首英及海乃小て乃海小来一和ありと云

世年間記事

正保申日向必寄湾山の瀬沼を渡りより大坂へ登せ大坂より京

下り此は内宿士山麓角と名付一りの大内小止ありひ面尚無

之唐松の二種ハ水唐二年の以武江小下をまより橋是にて橋

忍ふ分たり ○大橋を常盤橋と改められん正保の始にあり力富

○十河ひさひとて家をぬく事をもる十河辰といふ武家の人の以

はききよりいひあつる事とせ又此時代迄美濃飛騨を好むを津那

名所記ふりハ祭を世世の声小橋りよつと云こといふハ松虫の古

とハアんとをねさせつるを以て河ありと云

○世事終ふ云は時代京室町候の久吉仙舟の沖を賣始むを後

二徳市仲字を賣渡すの廿十嵐是を割割とて江戸あての世の大好菴

脊中善右衛門と始とつる 奥尾唐のまの衣あつて寛文は仲室町まで目一若虎が中村よりま仙舟は又世をわたりてあつた其の程門を流

と水といつる女形仙舟世をわたりこれ仙舟の元祖あるとありつるまのせんある未詳

質を仙舟保の以の芳髪立の更々世をわたり格別上下とも不幸若き男の髪小池と有るはたまぬと云ふこと一けるより一後種集ふもえり

○寛文正保の以長湯より唐本の商人和泉屋本之市といふもの

江戸より東の池の場小治一始て古書籍の賣買をす 後大書肆

中へ渡りり是古本賣買のよりわくと云

○或は家の不慮小正保年中江戸國の官車あり方城を度一市川

浪岩崩岩橋本頼司岩釣込小いよりある大川を踏りとて市中の景

寛永の國小治り一國中津若菜は後河内と越前は藩の障り下赤
が居あり日本堤の碓氷とくうらん塚とあり赤中一浦坂の辺二浦
と飛と物成は藩河の赤敷山の東向小門のり山若菜と後河内
町中とあり

慶安元年戊子 正月四 二月十五日改元

寛安中改元ありしを

改年の法寛安徳の天下也 平井ト養

○春菫蘭山小亮朝院七面聖宮基あり 寛文十一年今の如く
言申くうらひなり

○谷中聖令院七面聖宮勅清 聖山日明上人の三匠の局身丈七面丈五日のり
萬徳一後中小籠一板を蔵に一尚社を創と云

○四月十一日天海傍山一慈眼大跡と強号ををぬふ

○日光山之十二回浄志浄法念法華八講あり 寛永の末編法苑八講の元
あり

○五月男をむむひお中殿若虎犯せり事を林おせり時行某

麻糸といふ英お年の事お付際勅ふ及ひし昔く物成ふ

りり男色のり中此ときより止寛文の頃より又行きしり中中

ありて止つるより一同意小あり 昔の方云ふ男色を若虎犯せり道と云ふは
元及と云ふ虎の及れ及と云ふ虎の及と云ふ虎

あてを
信云あり ○九月十日田嶋稻荷社建立 是林兼次と
云人寄附に

○江戸中風長屋の遊女法創林あり

同二年 己丑

日暮里諏訪明神社造営 是と云ふ終の事
祠ありしと云 ○大塚善門山大慈寺法宗創

○二月十四日持時寺高浪卒 日十七年一本宗安
三年四月七日云 ○麻疹流行也

○六月廿日武蔵大北原江戸中武蔵町屋澤と死人恒多入多 上野
大仏

○五月十三日河越大敷殿 寛文十一年
甲寅八月

後藤一八の
と云ふことあり

○八月廿日江戸大地震 ○九月琉球人來聘 心機真志 川野之 日光山八泰

正安三年庚寅 十月田

二月山王権現社 河内内之統町移り 一説云實正三年十月

○男女侍勢字廟字清 出之奉行今云子

○二月廿二日夜江戸大地震あり ○四月十二日使客情願院長年生

主君人合不給多ははとも終くくくくくくくくくく ○五月國之使死 暮今も時宗源空高あり 平兼成の年田を吊り

○六月一日法蘭西艦長長 ○六月二日之江戸事親吉 皇山無無

○琉球人來聘 ○比井誠紀 ○八月七日殺父邪言大風由來本

交り
十文位

同正年 事外

東叡山 河内河造營 四月成徳後堂外北不造之

○二月十二日特種山雲六十三 ○秋深川橋橋 之橋之 之之 之之

○三月廿一日流編編 之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之

○十一月廿九日比井の堂堂 之之 之之 之之 之之

○十二月廿七日中殿殿 之之 之之 之之 之之

此年間記事

酒酒 之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之

之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之

之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之

之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之

○實水水 之之 之之 之之 之之 之之 之之 之之

外にハ、筋の商人ハ、好もあつて金子一分の銀成りハ、
 今も幾千の幣を、時々、年々、に、言々、と、漢宗の、果、より、も、日本橋の、南、水
 の町へ、来りて、と、の、こ、の、事、あり、是、ハ、室町、并、通、り、町、南、水、に、町、の、る
 并、錢、賣、と、て、數、百、人、各、と、賣、つ、つ、肩、あ、り、け、居、て、お、し、き、錢、を、賣、
 を、扱、十、の、の、り、つ、つ、ある、事、之、青、物、町、に、お、智、屋、一、軒、見、世、を、か、
 て、徳、藏、を、變、へ、に、九、十、六、の、本、取、の、錢、を、積、累、も、て、も、金、子、を、分、光、
 じ、自、由、に、お、智、屋、せ、し、た、故、に、自、由、に、お、智、屋、出、つ、つ、と、て、江戸、中、
 六、の、店、へ、來、つ、つ、お、智、屋、一、つ、り、是、を、見、て、江戸、中、六、の、お、智、屋、の
 見、世、を、つ、つ、と、て、
以上、事、補、合、考、少、か、梅、の、お、智、屋、
 之、者、物、丁、の、今、と、お、智、屋、の、の、こ、
 ○この時代、毎年、七月、盆、中、に、い、れ、り、市、中、の、男、女、踊、子、を、備、へ、夜、
 賑、り、○津、阪、路、沿、沿、薩、摩、を、交、り、山、丹、後、極、虎、屋、源、を、交、り、市、と、若、

あつて、後、を、清、き、り、つ、つ、と、て、南、水、を、交、り、行、つ、つ、

兼、應、元、年、壬、辰、 九月十八日、改、元

正月、廿、日、の、御、具、足、候、當、年、と、り、十一、日、不、満、了、 十日、曉、雪、降、り、所、候、

羅山文集

餅、資、座、上、甲、兜、蓋、 時、有、寒、花、發、孟、阪、 鐵、額、銅、頭、賣、銀、否

雪如白馬祭虫尤

○呂川寺水月觀世音の堂を修造一海、馬、山、呂、川、寺、と、い、ふ、
は、ち、を、さ、ら、ん、
 弘、法、大、師

安、永、有、一、の、永、福、土、主、の、堂、火、小、焼、き、て、存、在、武、田、方、不、と、も、色、甲、及、小、あり、一、を、九、之、一、
 今、年、九、月、中、旬、迄、ち、記、さ、り、院、を、修、造、一、を、を、さ、ら、ん、と、い、ふ、名、前、法、小、見、ん、え、ん、と、い、ふ、

○六月、の、危、舟、舞、妓、所、制、禁、あり、
お、智、屋、を、利、り、て、は、茶、の、帽子、を、さ、ら、ん、と、い、ふ、事、
 水、小、崎、作、所、市、評、評、候、在、り、の、孫、小、崎、

一、と、い、ふ、
 ○八月、廿、八、日、夜、に、大、風、雨、

同二年 癸巳 六月、同

今年玉川の上水を都下へ通して元慶の用を充てぬる

○玉川上水のきをくぬの方甲及丹波山の幽谷へ遊ゆこう遊あそぶ同玉丹波村を

つて武蔵の慶長ふるふる甲及一の原いちのはらより多津浦村と七里餘まで

羽村はむらまで十二里までより六と十六里計りして羽田浦より海へ合は

九里半 兼慶元年の春玉川に新築の築清右衛門とてこの形りて羽村

より江戸までのおそきを考へ同十月上旬上水は堀割の儀を命せしむ

おれの翌己未初夏より仲冬ふ至り羽村より江戸へ大木を運送後一

虎古門まで出川のお水を掘りてとてとて後徳方式お方市中

小分水して日用とて本板出川亦玉川稻荷社との玉川

○神田上水を開き一車へを始はじ始はじりて武徳編年集流ふ大久保

稗天正甲午 長命を交てお道を考へより多摩川の流儀を

小石川より引ぬるをせんせきとて六割神田上水のりあり一沾原せんげん流

ふは江戸野島よりき此池ありよりふは不足あり友兼寛永より

玉川を助ありふありれりといり神古神田上水再修の日記

友兼家より述る事とて松尾忠房一説を七寺ともあり始りりの

善法ぜんぽうを修しゆりて御家奇人伝ありは備文とあり一と云又堀よりあり

此事世上小傳ありをりて掘りし羽の寛文十二年九月始

て東条小右といひ又蒲ちやう幣へいとて一二年とて地宝二年ありと

さまたし羽の信しん辨べんありといひあり一権永年の版之此は善法ぜんぽうの

事なりとてあり一多摩原 年れ村 善法池 同郡原の田原

多摩川の水を流中荒井村の末ふあり合て神田上水の

多摩川の水を流中荒井村の末ふあり合て神田上水の

助ありとある今も地を原合村といふ 原合村 年終村より原合と

十二村を短く言田村といふ 田村 目白香の中を二つふるき一流八股

ありて大洗堰より江戸川は流ち一流いよありて小日向をとり

る府様津波の中を東流とす 東流 年終村よりふるきありのり

極ありて流子を 流子 長は 長 流津案の掛極を修ひ

小川町を短く津田といふ 津田 ありて又一筋六津田橋

う う 竜軍橋より本銀町本町辺あり 本銀町 本橋より本材木町を

支國の辺渡町等 支國 町敷九二百七十丁程あり

まよ まよ 通せざる 通せざる 赤坂溜池のありを引を新 新 のあり溜池

池のあり 池 こと引て用あり こと引 一 一 六 六 津 津 不 不 自 自 ば ば あり あり 一 一 六

池とありのありて 池とあり 万民 万民 恐 恐 け け 汲 汲 入 入 快 快 樂 樂 の の 思 思 ひ ひ を を な な る る 事 事 被 被 け け 不

津懸橋 津懸橋 修きて 修きて ても ても 於 於 あり あり あり あり とい とい ち ち を を む

○正月二日 正月二日 津門の内 津門の内 青山 青山 某 某 婢 婢 女 女 菊 菊 と と け け の の ま ま ぬ ぬ せ せ 秘 秘 藏 藏

の の 血 血 を を 破 破 り り け け 害 害 せ せ け け 毛 毛 を を 靈 靈 魂 魂 出 出 せ せ り り を を あ あ せ せ け け 事 事 人 人 不 不 輪 輪 矣 矣 け

ま ま とも とも 未 未 実 実 言 言 を を 知 知 り り け け ぬ ぬ け け 陰 陰 命 命 の の 終 終 あり あり け け 一 一

○九月 九月 琉球 琉球 人 人 来 来 聘 聘 正使 正使 正使 命 命 改 改 子 子 ○金 金 離 離 工 工 吉 吉 忠 忠 氏 氏 祖 祖 重 重 次 次 卒 卒 八十二 八十二 八十二

○新 新 年 年 祇 祇 易 易 行 行 院 院 小 小 俠 俠 客 客 助 助 あり あり 暮 暮 と と 終 終 せ せ り り の の 有 有 形 形 入 入 派 派 人 人 信 信 士

兼 兼 寛 寛 二 二 年 年 巳 巳 二 二 月 月 十 十 日 日 と と 禰 禰 一 一 例 例 不 不 女 女 の の 法 法 名 名 あり あり を以て享和又化中鳥子 馬子 馬子

舟 舟 敷 敷 芝 芝 居 居 小 小 詠 詠 り り 一の香花を掘く

兼 兼 寛 寛 二 二 年 年 甲 甲 午

後 後 承 承 亨 亨 親 親 世 世 吉 吉 岡 岡 根 根 以附賽旗を合三回五の入れ小原一妻後 せーと云ふは平氏の香花あり書せり

○今 今 年 年 町 町 奴 奴 津 津 穿 穿 釘 釘 あり あり 夏の市を備廣大橋を築かといふ由傳書と居せ 西堂の事ありて百組ありて号して市中をよる

喧嘩を仕つけ流人の防せしもの云々組の云々木の子碑世前の子跡考柳まゝの
の用持兼赤を見てとて疑を去るべしこの男浮世の門山申源方云とりのもの云々
税町まの法とる後切し附辞世

只んがまゝとんをるべしうらむるうらむるうらむるうらむるうらむるうらむる

とま別云云云々この所の町奴の名二十に人許漁小見えんり

○市村羽方忠つら芝居あておまねを始むおまねを始むおまねを始むおまねを始む

うあやうあやうあやうあやうあやうあやうあやうあやうあやうあやうあやうあやう

せしとらう芝居の悪名を流平と云しとて

○十一月十八日将仕休伯長伝率 七十八女

此年間記事

此年間記事

兼寛中其身町とり品川まで浦伝ひ岩端石櫃を令せし

由りまゝ集まらるる有 武考志 料か

○昔くお流平云云安の願夏足年終き而船よて流平あり

屋根船を扱へる浅草川を乗取してまむ足船遊山の始りあり

翌年大身流もありお流平よりあやう大勢あるお流平よりあやう

大船が来にありもあり兼寛の以船遊り之あやうお流平の年三言

江戸津の大火事後二年船遊止む万流の以又く流平船伝りか

流平船を流平船伝り大く流平船伝り大く流平船伝り大く流平船伝り大く流平船伝り

名をつけ川一九〇〇年東九大災九山一九〇〇年一九〇〇年一九〇〇年一九〇〇年

無名ありて英をさすし流平奉十人あまの餘十年之流平の流平

掛けあはし是を武士のたふとする云く 中右判涼着月の船大く二役を佳境と
せるお流平のあやうお流平よりあやうお流平よりあやうお流平よりあやうお流平より

お流平集小三役
しりふと云る也

山あり又船もあり川もあり船ありひとあやうと云ふこの系

同書云 文を累ひ お流平のあやうお流平よりあやうお流平よりあやうお流平よりあやうお流平より

顔を見せに甚かき七才已後他人小まゝとて女子計付並若お
 洲の面をくろく之遊唐の以迄の志人なり獨えくべきを定めてあり
 し一才流の以てり江戸中止む大火の事以後おめ人のよふお
 以小松板より小笠原家の以小態谷^{こまや}並おもそのあつちなり八分五
 卷を年り又天和の以貞享の以より編並止る^{おみぎ}世^よ館^{かん}並おあつち
 上中おあま並お成る云く○大身の格別小身の人小侍^{おじ}危上中とも
 上^{トモ}又を橋^{はし}計^{はかり}以て^{おし}懸^かを^か死^して^お歩^あり^まる^る人もあり又六板
 と尺の掛あて^か疎^そ是^しお^しけ^る人もあり中間を一寸ある^おも^も
 一^おあ^ある^る云^い、^お前^{まへ}く^おお^おり^りお^おは^はし^し時^{とき}世^よの^の風^{かぜ}俗^{ぞく}事^{こと}ハハハ
 記^しを^を年^{ねん}下^{した}り^りて^て世^よの^の知^ち而^に也^{なり}畧^{りやく}以^も

○福免版仲^{ちゆう}九子^く村^{むら}羽^は末^ま持^ぢ現^{げん}天^{てん}正^{せい}中^{ちゆう}の^の幼^{ちゆう}法^{ぽう}なりとりの兼^{かね}意^いの^の以^も矣^{なり}忍^{にん}今^{いま}は^はの^のせ

小舟二隻との小舟のさうこ中風を吹ひ是あつてけり歩けり
 舟非人と成この取お味りしうぬ社をりてふ思候の具法を以
 以歩自在とありよんてぬ社を法して番を敷り又指人^{さし}非^ひ貧^{ひん}おとあり
 江戸兼を在の志人系指^{さし}群^{ぐん}集^{しゆ}以^も多^た暇^{じま}しうりし
 兼^{かね}意^い二^に年^{ねん}刊^{かん}行^{かう}の^の江戸^{えど}圖^ず本^{ほん}哲^{てつ}也^{なり}今^{いま}小^こ柳^{りゆう}町^{ちやう}の^の取^とり

浅草法門内^{せんそう}内^{うち}で^で喰^く町^{ちやう}の^の辺^へ不^ふ雲^{うん}光^{こう}院^{いん}弥^や勒^{りやく}寺^じ所^{しよ}今^{いま}も^も多^た人^{にん}り^りお^おん
 津^つと^と津^つ安^{あん}も^もせん^{せん}と^とト^ト預^よ敷^{しき}寺^じ日^{にっ}輪^{りん}寺^じ知^ち足^{じく}院^{いん}在^あり^り井^い田^{でん}川^{がわ}の^の今^{いま}
 新^{しん}と^とし^し橋^{はし}を^をら^らお^おん^ん人^{にん}橋^{はし}井^い田^{でん}橋^{はし}を^を大^{だい}炊^い飯^{はん}橋^{はし}に^に記^しり^り日^{にっ}本^{ほん}橋^{はし}西^{せい}の^の橋^{はし}
 とり^り南^{なん}橋^{はし}町^{ちやう}迄^{いた}の^の町^{ちやう}屋^やの内^{うち}後^ご原^{げん}五^ご馬^ばの^の屋^やに^に記^しり^り日^{にっ}本^{ほん}橋^{はし}西^{せい}の^の橋^{はし}
 庵^{あん}お^おひ^ひこ^こセイ^{せい}フ^ふン^ん寺^じ琳^{りん}銀^{ぎん}治^ち橋^{はし}お^おふ^ふの^のあ^あり^りか^かん^ん通^{とう}一^{いつ}丁^{てい}目^{もく}東^{とう}あり^り
 本^{ほん}と^と同^{どう}二^に丁^{てい}目^{もく}東^{とう}あり^り一^{いつ}丁^{てい}目^{もく}東^{とう}あり^り一^{いつ}丁^{てい}目^{もく}東^{とう}あり^り
 今^{いま}春^{はる}七^{しち}才^{さい}あり^りと^とあり^り八^{はち}男^{なん}町^{ちやう}又^{また}井^い田^{でん}町^{ちやう}の^の水^{みづ}も^も八^{はち}男^{なん}町^{ちやう}有^あり^り山^{さん}王^{おう}
 法^{ぽう}後^ご取^とり^り今^{いま}の^の辺^へ在^あり^り津^つ城^{じやう}橋^{はし}と^とり^り南^{なん}ハ^ハ丁^{てい}橋^{はし}を^をて^て院^{いん}

式五三

七

教字ありしつ燬く一移りてを跡大抵武家不改まり

明暦元年乙未 四月十二日改元

梅翁の集小年号改元の案区

明暦や梅のあゝこふひくろくか

とひふあり改元はに日ありりり

○下谷正燈寺宗刺関山愚堂和尚 和尚の實文元年正月朔日寂八十
數翌より大田室澄圓原と遷居をあり

○玉川上あり今年ふり金く減乾せし中津田同言ふか

○市谷平安寺月桂寺と改めむ ○六月廿五日於本心寺 新之
在丈

号する東久人後系 正徳翠屏殿新副使秋漳瑜陽漫事
南龍翼旅宿年誓ち之韓人日光山梅瑞を

○十一月十二日医師板板ト彦率 名如春後系と申一医王院小系林行堂撰
是一碑六修長院ありト彦(後系)所利協

の辺小文庫を建和淨の書籍を収め 同し以後系流坊町の小裏小塚田加州彦
法入小端むこれを後系文庫といふ

の法下中じありけ内い小大あり土を造りて内小和淨の書板芳史を

流へらり世小法系文庫と稱しりりりり

同二年 丙申 四月

正月廿二日夜赤雲ふあり ○正月廿四日ひせのり自己の存をふ

ては家の老おびさるるの若かましましたると合せり

○後系山門の仁まこの以波を意りて世小云やノ一其後群

を末と ○六月末系角方小んゆの年めく小二年あり

○六月廿日より親世まま勤進能身行 非田橋志
田原の裏 ○後系ふ於て勢 しん
茂

○十月九日吉系町をむ 田地あり 戸とむる代地とて此方には言

坪の地を日本境の辺 千束の月
田地あり あてりまは引料とて合まき方をま

小右刻十 あふし云 下さるる旨令せり ○十月十六日夜長後町より火水風

流く中橋南銀治町松町辺歌焼

○十二月十六日茶人令森雲乃及度率

公長迫号宗知

明曆三年 丁酉

正月九日谷竹町火事 二日赤坂町火事 九日吉祥寺邊中町
火事 ○正月十八日乾大風来刻より幸にみり目裏幸妙より火火
湯湯津田を渡り津門内町通町筋豫念河宿京橋八丁地
屋敷殿を以て後炮海手佃島深川より翌十九日巳刻より石川河邊
京新嘉通町より焼中一牛込田門田安田門津田橋田門常盤橋田門
皇後橋田門八代河原大島上流野崎を橋田門等焼亡又同日吉
町類町云丁より火来て幸流田門の弁橋田鹿田門出雲宿下橋上町門
目つき 赤札の辻海を以て焼亡地数焼死以上のはなを以て而御宇法蓮本
七百七千餘宇組一組を救救を以て以皇社之音平御宇町を

田百町行町八百町焼死人十萬七千六百六十人といひ傳へ奉る所

二町に方の地をぬひ非人を以て死骸を船まで運りぬ塚に築て

する院を建ててお寺とし無縁者回向院と名のありぬゆ

及ふと云ふお寺一廿一日お寺て大菩薩承價一附
并を掲げて族民の困苦を以て乃路小悲蓮院 正月廿二日より七日の乃火災

を以て肌僅お及ぬ業一節くお於て粥をぬきり又町中へ銀子

を以て費用 金中一十萬ありは二万ふ
之を以て賑ふお八分より を下しぬきり

因獄の罪人を以ての附致
とらふおこの時より 視吾輩を集 江戸田祿の後後お小座をあらうひまか人をむをん

とらむいおとむいおむ世の中の家を治しは吉川惟足

正月下旬吉原町小屋掛を命せしむ

六月今の地引りり新吉原町と号し八月より商賣をせむ

車跡合考おこの時二日在床の内今の筋
この町を以て荒地おて一お後お

○世時武家の藤原後時つぎい又寺院も不替ありて有る様あり
 ありと橋より約込の橋また橋四本を禱と橋より入り肉と表つのみありありあり
 靈山も深空も法禪もいりまも湯治もあつり大少後浅きへり川も
 瑞林も昌平橋もあつり谷中へ橋を敷き八丁橋より浅きへ橋隨之
 院日禱也今の毎葉 世禰也今の小 非田より浅きへ重徳も天藏院あり
 系内門内より浅きへ今の地へ橋あり

○世時代今のあきへ英會を前よりあつり浅きへ後今山乃
 門もあつり茶飯豆腐汁黄湯大豆あつりてあつり東と名
 流けへあせへを江戸中橋より今山乃あつりあつりあつり
 とて藤の糸禱もあつりあつりあつりあつり

○浅きへ附前もあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

猪牙船を創りて山岳通ひの案もあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

万治元年 戊戌 十二月間 七月廿三日改元

正月元日夜市谷安養寺と二世秀峯のあつりあつりあつりあつり

和舟を流し白帆とありあつりあつりあつりあつりあつりあつり

より夏落著しと江戸砂子よりのり

○正月十日幸々之りめより火引渡江中大神焼亡東洋

○二月本挽町海軍本坂小日向築地あり舟止山麓より築地の西へ小日向築地の北この山を引田を地取を

○四月十五日時時素川後改率廿二日

○六月九日後志を順死中村劫之助 ○夏二田の地小倉は度出別かえ祖あり

○秋の地をぬきし地は後田堀り老朽小堀り高跡なり別堀堀り

移りもたすく松樹を植り遺蹟を標せり寛文二年夏弘文院堀

○秋玄降落氏寛永中花子の粗さより名を異なり後通世く

道沖と号し楊梅松泉寺鏡る比の辺并後一にの種を種く

○秋玄降落氏寛永中花子の粗さより名を異なり後通世く

建より今年七月廿七日七千餘方より後通世く洞房宿屋

○八月江戸中盤結株一町小まき下り八百八株小倉の梅り小江戸町

概八百八町といふ事此時代の事寛永のありぬぐりあり 今八千六百餘町小

及より○今年日本橋市善法始り○九月十二日唐僧陽元禪師

掃及善門寺より江戸小倉より一州湯治禪祥院小七十餘日迄

ありあり夏落著しと江戸砂子よりのりこの時敷 ○溪川海後寺宗刹尾山強

○同岸寺宗刹尾山日 ○日暮里經王寺宗刹元禄師

○喜山崎園齋翁江戸小倉秋為系以遠遊紀行あり

○今戸村百姓九高者が男九高助加仲のそふより編為社を

有るく後以是を九高助徳翁といふ○九月明の宗匠國性翁

鄭廣切本邦へ後志を移す名ハ芝魁又森信といふ今年三十九年

○東海乃名不記成民井了三作

寛文中板切

万治二年 己亥

正月二日より二月廿四日まで火災百廿五戸及び法人安堵あり

あつりーと書 全巻書正月十二日 ○日本橋を掛返らる 或年正月

廿四日戸大火あり ○二月山崎雲斎翁再江戸遊八月帰京以再遊記あり

死乃身延形元とて
身延形記 万治二年亥

九月廿日此上より下りてくる上人皆中へありとて此法を教へて其て江戸へ

日本橋邊日本秋 更無一事掛心頭 今宵新見江城月

影滿扶桑六十州

せとき不ふ並居てつましくある後片唐のやまとの又とらんふらんつとをわ

ふささくまてらんまあれた新も旅らんも神の思ふるむきりの月
うたあうら踏ひんまこあー系統流る歌をたてた時つづき
月もまてつとんひんをせす三河川越ひきねすの藤号ん片

○下谷永昌寺下谷長者 長者町へ去る 飯居のふと云 の墓とてありと先院後を参

玄安居士万治二年亥九月廿九日とあり年号新くけはる銀一

ふさとしまへしすまふた新し種とたむ神のまほきるむきししの月

うたあうう種ひもまこあし一宗統治の歌をうた武彦時つま

月もまへしととせみひうをせすく南川越とひしきおね守の藤号んり

○下谷永昌寺下谷長者

長者町ハ昔者
領居の所ト云

の墓とくありと光院殿を奉

玄安居士万治二年亥九月廿九日とあり辛号新くけはる銀一

けしと長安の子孫かとの最盛也

○建治元年の事他書に命はしむる事出無き所なり

かゝる大川に柳を植へて茶の木を植へては

年迄の事如斯く繁盛して大川に流れて

事或は成りて未だ城跡に目白の地あり

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

て元の因烟あり元禄元年又昔の如く武士地町

○十二月聖巖を深川に移して臨町を築き

今年也○十二月五日春永二浦登の如き

山家春永の如き事あり又同西の方より

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

て元の因烟あり元禄元年又昔の如く武士地町

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

て元の因烟あり元禄元年又昔の如く武士地町

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

て元の因烟あり元禄元年又昔の如く武士地町

顯西國橋

鸞峯先生

枉梁新建枕長流

人是陸行吾在舟

疑似猛菴橫日野

流美の意

受く匠を五層て難修せん木竹材隨員令の地を具きて三上十橋けりし

○兩國橋造りて

○本年改會院七面宮再建

○西月十日大火あり

万派二年庚子

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

て元の因烟あり元禄元年又昔の如く武士地町

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

て元の因烟あり元禄元年又昔の如く武士地町

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

て元の因烟あり元禄元年又昔の如く武士地町

○今年より呼ばれ後地を築きしを川を築

をりて或は成りて未だ城跡に目白の地あり

海軍に關する事如斯く繁盛して大川に流れて

總州為尾武為頭

○本挽町立丁目小森田を所立為始て其居真行後代に始

○五月霖雨あり ○九月廿五日は朝基所二世大橋宗桂二本橋上行七小

○むぎ一あぶき二巻押行此層大火のつて死せるま

此年間記事

上野小令銅二丈二尺版の大仏の像は唐万治の比本食洋雲再建

○大久保法皇より七面宮勅請 ○明人陳元寶波國の札を渡さ

本邦より江戸三田番町永島山本島島小偶居ガキキヨ

後村七赤在島磯貝次所者馬の三浦次所者馬のふ小治りけり

捕りぬありぬを投をひんるふありありといふ二人は

尾武小終まり紀創流葉洲尾武小終まり紀創流葉洲後村氏も田

長心末所名中安中の人中門人千餘人ふ及りあり

○万治の以後及所於川の辺より酒樂ヨシキ

懸片紙帳の内入りて馬お八人の役を獨りてをイ

茶紙よりり八人藝のちりあり

寛文元年 辛丑 八月国 四月廿五日改元

正月十九日の秋光物あり水一ありを光物軍町移りけり

○正月廿七日響通町より火火大寺の辺飛治橋系橋の辺

本挽町まで委家方町を疑く焼亡 ○勅進相撲今年より毎年

續く真好も ○二月より浮世宗席ソウジヤウ

○二月十二日林漢耕稼三十八名を後号し函三子

○二月辛卯改元一時

○三月...
并海考ふか川より角う又
東吹のすさひあつて

○六月...
秋五十年末の豊作と云

○八月...
十月廿八日江戸大火あり一は徳海と云ふ物西陣あり

○十一月...
焼亡

○十二月...
寛文二年 壬寅

寛文二年 壬寅

○正月...
○正月廿八日先祖古尊より作年
九十二古尊實監の家あり平次氏
あじの代く古尊を以て氏と云

○二月...
○三月廿二日刻大地表
○五月六日より廿日また日月あり事紀の
あつて

○九月...
○九月廿二日小治...
付の若妻ありてりし者有江戸増く定板建川

○十月...
○十一月...
市村有くありて右通海なる海乃
少の程云を具りて世より有る

同 二年 癸卯

○正月...
○五月...
○六月...
○七月...
○八月...
○九月...
○十月...
○十一月...
○十二月...

○六月...
○七月...
○八月...
○九月...
○十月...
○十一月...
○十二月...

○羅山文集刊行 百五十五卷六十本 ○飛戸で満宮今の地へ宮建拂つ
心字の沈及揚生機 は年八月祭礼神樂引出の儀武寧府の例より申す申すの
地を巡りて掃目集小本西安生その形くこみ成る時

○本朝編年源を本朝通燈と改めあふ 存四子た燈も
念佛二昧を

○八月十五日飛撮海海寺の羅山念重和尙 念佛二昧を

○今年より天和二年より飛戸村小磯を結

平安方渡りの御佛を懸けて掃目集小本西安生その形くこみ成る時

天中
一母文

寛文元年 甲辰 五月箇

○賀賀八幡宮修葺 ○版田町法務館入小令せしむ

○けんじん蕎麦切始 價八孔 ○七月七日連平作里村玄後卒 廿五

○市村作之助玉川を掃目集小本西安生その形くこみ成る時

○同五年 乙巳

同五年 乙巳

○八月五日連平作里村法眼玄陣卒 廿五

○秋絹布の花廿二丈六尺小宮くくく ○八月青高人け鯉の古史を形く

く目んせくく信りあまきく市津へ令せしむ

○八月多敷の医師玄陣春翁 ちのゆんせう 江戸へりる紀行あり鎌倉紀行を

合くく二書 ふゆうし あり令家解もいんを形せしむ

○霜月冥多へ玄門跡匠下向の時隅田川をく

帰るされ冥多の里小若もあれあすくく川系のある福寺 道見親王

○徳島藩秘録の要を掲ぐく江戸本換町小大和寺を庵と云匠あり

又同町小津邊に常兵衛長谷川助吉馬といふ浪人徳島を巻け

おのろこ小卒のところがあつたやうな
ははらり幸而と云ふことありしやう

○因里直指院場巻寂之通入定氏

直指院の場巻とて本會の
聖あり念佛の願を刻

あつたことなご小卒の安直に因里直指院を結ひ御珠の人をいふ念仏をすむ寛文六
年二月彼夜念の始年十月廿日御せせんを知りて強人小若く又西中い
たん若ありて世の中のをあつたを感へて發心し妻子を捨直指の寺なりありけり
昨小せんとて御せせんといふ今年十月十八日念をうけられ六體大徳と成て死生の
橋を拂んとて剣をめて穴小入指人念佛の聲とせも小土を投げて斤断小僧む又坊巻
と十月廿日小若く念仏投返す所ひに十七才小しと眠りて御せしに御せし中若く御
せし所は直指院場巻集まると幸願しう
しつり以上は戸名所記の又を畧す

寛文八年 戊申

正月廿八日乾の方より粟の方小卒の如き白鼠立夜に防以消す

○二月朔日未上刻才込酒井家由下在表ありお火由兼山町由徳
士町市谷田町小ぬる同日又市谷天徳寺寺内よりお火由納戸同ん
原表由兼山町同ん在表上原瑞瑞坂武家方六番町お火由一五番

町二番町糺町一丁目より六丁目まで橋田辺法原山在表ありお火由

ありひ小辺をいふお火由新橋まで法原山あり又法原のありより

お火由法原山在表由新田橋孫倉河原日本橋まで焼亡之方の火あり

一折小あり表お火由焼く焼死せり又同お火由折小谷竹町早

よりお火由大表在表お火由○二月二日日輪二ツありお火由

○同月四日辰小刻新橋よりお火由大表在表お火由焼死坂町

日る法原お火由二田寺町表お火由總表を子弟まゝく焼亡

又同日中谷車坂よりお火由下谷法徳士町在表徳寺あり本

所へお火由一二の橋町在焼亡○同月六日未上刻小日向藥地武

家よりよりお火由新橋通町身込町の内へ入此所焼て田安由門

のうち小入又柳原在表ありお火由新橋通町版田町お火由

坂倉^{（ま）}にて焼亡 古^{（二）}日之火事^{（一）}武家^{（一）}邸^{（一）}を焼く^{（一）}二百餘軒^{（一）}を焼く^{（一）}

○二月^{（一）}若原^{（一）}邸^{（一）}内^{（一）}に^{（一）}火^{（一）}を^{（一）}ひ^{（一）}く^{（一）}火^{（一）}燬^{（一）}町^{（一）}依^{（一）}見^{（一）}町^{（一）}と^{（一）}号^{（一）}氏^{（一）}
依見丁の
年表の
古^{（一）}後^{（一）}ある^{（一）}故^{（一）}く
名^{（一）}つ^{（一）}け^{（一）}し^{（一）}と^{（一）}す

○二月^{（一）}幕^{（一）}末^{（一）}由^{（一）}下^{（一）}向^{（一）}北^{（一）}時^{（一）}

月^{（一）}夜^{（一）}も^{（一）}林^{（一）}幕^{（一）}末^{（一）}あり^{（一）}て^{（一）}作^{（一）}き^{（一）}見^{（一）}る^{（一）}雲^{（一）}を^{（一）}雲^{（一）}ら^{（一）}の^{（一）}雲^{（一）}と^{（一）}名^{（一）}を^{（一）}号^{（一）}氏^{（一）}
幕末
依見丁の
年表の

○夏^{（一）}徳^{（一）}玉^{（一）}昇^{（一）} ○二月^{（一）}より^{（一）}三^{（一）}月^{（一）}迄^{（一）}火^{（一）}の^{（一）}焼^{（一）}く^{（一）}
是^{（一）}と^{（一）}火^{（一）}の^{（一）}焼^{（一）}く^{（一）}
は^{（一）}つ^{（一）}と^{（一）}り^{（一）}

幸^{（一）}指^{（一）}出^{（一）}の^{（一）}乃^{（一）}く^{（一）}新^{（一）}橋^{（一）}を^{（一）}掛^{（一）}く^{（一）}

○卯^{（一）}宿^{（一）}より^{（一）}甲^{（一）}里^{（一）}水^{（一）}坂^{（一）}塚^{（一）}村^{（一）}に^{（一）}土^{（一）}中^{（一）}を^{（一）}穿^{（一）}ち^{（一）}て^{（一）}合^{（一）}後^{（一）}五^{（一）}寸^{（一）}の^{（一）}観^{（一）}世^{（一）}

高^{（一）}を^{（一）}掘^{（一）}り^{（一）}背^{（一）}刻^{（一）}して^{（一）}弘^{（一）}長^{（一）}二^{（一）}年^{（一）}二^{（一）}月^{（一）}と^{（一）}あり^{（一）}里^{（一）}人^{（一）}亦^{（一）}市^{（一）}を^{（一）}

嘗^{（一）}て^{（一）}安^{（一）}重^{（一）}と^{（一）}夕^{（一）}敷^{（一）}の^{（一）}観^{（一）}世^{（一）}高^{（一）}是^{（一）}なり^{（一）}
安^{（一）}重^{（一）}
夕^{（一）}敷^{（一）}

○十一月^{（一）}十二^{（一）}日^{（一）}後^{（一）}夜^{（一）}八^{（一）}代^{（一）}吊^{（一）}糸^{（一）}牽^{（一）} ○或^{（一）}事^{（一）}亦^{（一）}實^{（一）}文^{（一）}九^{（一）}年^{（一）}江^{（一）}戸^{（一）}小^{（一）}井^{（一）}三^{（一）}番^{（一）}の^{（一）}
観^{（一）}世^{（一）}札^{（一）}不^{（一）}始^{（一）}り^{（一）}て^{（一）}大^{（一）}洗^{（一）}九^{（一）}代^{（一）}小^{（一）}男^{（一）}女^{（一）}

昔^{（一）}く^{（一）}相^{（一）}決^{（一）}せ^{（一）}む^{（一）}ら^{（一）}る^{（一）}事^{（一）}又^{（一）}も^{（一）}く^{（一）}あ^{（一）}り^{（一）}て^{（一）}は^{（一）}十八^{（一）}日^{（一）}と^{（一）}あり^{（一）}

万^{（一）}日^{（一）}の^{（一）}回^{（一）}向^{（一）}振^{（一）}と^{（一）}て^{（一）}人^{（一）}集^{（一）}び^{（一）}る^{（一）}事^{（一）}亦^{（一）}一^{（一）}實^{（一）}文^{（一）}申^{（一）}奉^{（一）}小^{（一）}始^{（一）}り^{（一）}と^{（一）}あり^{（一）}

實^{（一）}文^{（一）}九^{（一）}年^{（一）}己^{（一）}酉^{（一）} 十^{（一）}月^{（一）}四^{（一）}日^{（一）}

二月^{（一）}に^{（一）}日^{（一）}流^{（一）}京^{（一）}十^{（一）}五^{（一）}堂^{（一）}焼^{（一）}亡^{（一）} ○二^{（一）}月^{（一）}二^{（一）}日^{（一）}流^{（一）}星^{（一）}末^{（一）}乃^{（一）}喜^{（一）}雲^{（一）}の^{（一）}如^{（一）}

○奉^{（一）}公^{（一）}人^{（一）}が^{（一）}掃^{（一）}り^{（一）}二^{（一）}月^{（一）}二^{（一）}日^{（一）}あり^{（一）}し^{（一）}ら^{（一）}今^{（一）}年^{（一）}と^{（一）}り^{（一）}二^{（一）}月^{（一）}六^{（一）}日^{（一）}と^{（一）}改^{（一）}す

○龜^{（一）}戸^{（一）}を^{（一）}瀧^{（一）}宮^{（一）}社^{（一）}地^{（一）}を^{（一）}法^{（一）}住^{（一）}坊^{（一）}を^{（一）}初^{（一）}清^{（一）}し^{（一）}社^{（一）}を^{（一）}嘗^{（一）}む

○七^{（一）}月^{（一）}旅^{（一）}夷^{（一）}人^{（一）}礼^{（一）}を^{（一）}去^{（一）}り^{（一）}十^{（一）}月^{（一）}ま^{（一）}て^{（一）}小^{（一）}松^{（一）}前^{（一）}屋^{（一）}と^{（一）}り^{（一）}平^{（一）}お^{（一）}り^{（一）}

○七^{（一）}月^{（一）}十八^{（一）}日^{（一）}能^{（一）}人^{（一）}石^{（一）}田^{（一）}末^{（一）}將^{（一）}率^{（一）} ○八^{（一）}月^{（一）}十^{（一）}日^{（一）}大^{（一）}地^{（一）}震^{（一）}
八十^{（一）}兩^{（一）}文^{（一）}後^{（一）}系^{（一）}
世^{（一）}終^{（一）}ち^{（一）}り^{（一）}事^{（一）}

○大^{（一）}作^{（一）}河^{（一）}原^{（一）}流^{（一）}家^{（一）}費^{（一）}以^{（一）} 家^{（一）}後^{（一）}人^{（一）}依^{（一）}系^{（一）}久^{（一）}左^{（一）}馬^{（一）}寺^{（一）}井^{（一）}在^{（一）}た^{（一）}也^{（一）}なり^{（一）}

○常^{（一）}雲^{（一）}京^{（一）}市^{（一）}大^{（一）}馬^{（一）}寺^{（一）}等^{（一）}なり^{（一）}

寛文十年 庚戌

五月十二日辰下刻より巳半刻まで嵐の如く成り掛りふふふとて人馬の

○八月大風 ○予翁傍於不忠并天社の根下地を築立小堂ふのこころ

を遂内邦の書籍を収めて徳人小としまひて叙とうむ天和二年 東之の宋

学寮を立出籍 二百七十一卷 ○本朝通鑑成 撰山抄家二先中編輯

同十一年 辛亥

予翁傍於不忠湖中於小築く下の地へ輪を建て

○白金瑞雪亭完創 尾山本巻作 芙蓉船匠之 ○七月後水尾法堂を飛戸天満

雲へ由震等乃額を掲ぐ ○青山池を築く完創

○七月琉球人來 正徳合武王子 同光山二年迄 ○八月廿九日南大風雨波あり 後集下巻 小日向寺外

○十二月十二日晴天震動あり

夏田所あり所降

同十二年 壬子 六月全

二月二日身込洋福瑞坂敵討あり 同姓華人一社を討ち遠流小ませむるはと

○二月初を左和樂小箱成以事を止らま大佛を落せ町中初を

以てはりの弄りやぐらう言足結の行人着止穿撃あり うやうやう人偏刈家 圓暈小のせり熱撃の

男行獲刃をうつゝあきこる 形のお黄あて後剛あり ○同六月晦日大橋流等道祖大橋を改率 お花 結沼

○七月十一日持時元後秀俊率 八十五人

此年間記事

此年間記事

不忠并天の島へ石橋を渡して急務の通流と成 は橋六貫重中子 後集下巻にて載れ

○品川河原山へ橋を植させしむ

南二丁目経路加え清板とあり
郊外を加う事
こまに路るん

武江年表卷之二 畢



